
RESTART

相沢敏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RESTART

【Nコード】

N9276B

【作者名】

相沢敏

【あらすじ】

三月二十三日。中学校の卒業式の翌日に高校入試の合格発表の日。見事高校に合格し足取りも軽い帰り道で一人の少女と出会う。その少女に強引に付き合わされ一日を潰してしまう。そして四月四日。入学式当日にその少女と再会する事になり、新聞部に強制入部させられてしまう。

第1話「RESTART」

サッカーの試合に置いてボールがコートの外に出た後に始める事を「RESTARTリスタートという。これはプレイを再開するという意味だが、この言葉を他の状況にも当てはめてみてはいかがだろうか。そう、例えば学校生活。学生といえば小学生から高校生、大学生だがそれを一つのゲームをプレイしているかのようにたとえてみる。当然進級や進学のシーズンになると一時ゲームは中断となる。そして進級かもしくは進学をしてゲームはリスタート。再開される。

長々と何が言いたいのかといえば。つまるところ今の僕は学校生活というゲームを一時中断してリスタートに向かって歩き出しているのだ。それに今回は中学校から高校へと進級した後の再開だ。今までと何かが変わってくるのかなと密かに期待と希望を抱いて、能天気にも桜が咲き誇る階段を一段飛ばしで駆け下りていた。

今日は合格発表の日だった。中学校の卒業式は昨日挙式されたのだが、正直な話全然卒業式なんか覚えていない。覚えているのは落ちていたらどうしようかな。とひたすら一心に考えていた事だけだ。ともあれ、無事合格も果たしてこれからの始まる高校生青春のページに色々と思いを馳せてみたかったのです。

「うるさいわね！ 謝ったでしょ！」

青ヶ丘高校（通称青高）に続く長い階段を降りた先には、道路があり歩道がある。その歩道にはバスの時刻表もといバス停が立っている。そのバス停の前にいる少女が大声をあげたようだった。さっきの語気からするとなにやらまずい雰囲気かもしれないな。

「ああ！？ 人にぶつかっておいてその態度はなんだ！？」

「昼間から酔っ払ってそっちからぶつかって来たんじゃない、それでも謝ったんだからむしろ感謝して欲しいくらいだわ」

「うわ。酔っ払って少女に絡む大人もみっともなくてあまり関わりあいになりたくは無いけど、少女の方も凄く気の強い。これまた関

「今何時？」

「はっ？」

あまりにも突拍子も無く聞かれたので、間抜け丸出し的な声で聞き返してしまう。その反応に少し機嫌を悪くしたのか、さっきよりも険しい顔で、大きい声でもう一度問いかけてくる。

「今何時!？」

「え、え」と

とっさに左腕にしている腕時計を見る。大きい秒針が一。小さい秒針が十二を指していた。つまり、

「十二時五分」

という事になる。少女はお礼も言わずに十二時五分という言葉を小さくぶつぶつと呟きながらバス停の時刻表を指でなぞる。今の内に逃げておくか。なんとなくそう思う。というか何かがそう告げている。と言つ訳で僕は回れ右をして。

「ちよつと」

この人は後ろに目でもあるんですか。そしてどうして僕の逃亡を許してくれないのですか。

「なに？」

「もしかしてさっきのバスがこの十二時三分つてやつ？」

この場合もしかしてもくそもなく、さっきのバスが十二時三分発のバスだろうな。その事をストレートな表現で伝えていいものか。こう変化球を交えた方が得策かもしれない。

「時として、人生は不幸の重なりが起きるもので、しかしだからといってヤケになってはいけないので」

「あたしが聞いているのは人生の講義じゃなくて、バスの行方よ」

「十二時三分発のバスは残念な事に僕達の横を通っていったね」

事態を悟ったのか、少女はバスの時刻表と睨めっこを始める。ちなみに僕もそのバス停の時刻表チェックしたけど十二時のを逃がすと、次は三時になるんだよね。ビバローカル路線の便の悪さ。僕もあのバスに乗らないと家に帰れないので、少し困っていた。青高は

街より少しはなれた山に建っているから交通の便が悪いのだ。

「あんだ。自転車を調達して来なさい」

「はっ？」

「あんだ耳遠いの！？ さっさと自転車を調達して来なさい！」

いや、はつきりと聞こえてはいるのだよ。自転車を調達して来いと言っているのははつきり聞こえるが、どうして僕が自転車を調達してこなければならぬのか、その辺の明確的な説明が少しは欲しいような。

「あんだ、歩いて帰るつもり？」

「いや、さすがに無理・・・」

「だったらさっさと自転車を調達してくる！」

何かとてつもなく理不尽で納得は出来ないけど、僕は回れ右をしてさっき一段飛びで降りてきた階段を二段飛ばして駆け上がったいく。といつても校舎に戻った所で、自転車なんかそこらへんに転がっているわけでもないだろうし。

前言撤回。職員玄関の前に手頃な自転車が一台放置されていた。

茶色のような赤色の自転車でフレームに「職員緊急時用」と書かれていた。僕の今の状況も緊急といったら緊急なので（主に僕の命の緊急問題）チャレッド号。（命名僕）にまたがり、さっきのバス停まで戻る。

「遅い！」

いや速いだろう。命じられてからまだ十分と経っていないはずだ。そんな速さで自転車を調達できる人間はそんなにはいない。五万といるだろうけどさ。

「あんだ漕ぎ役ね」

「はい？」

「自転車一台だけなら二人乗りするしかないじゃない、ほら行くわよ」

三月二十三日。高校入試合格発表直後のお昼に僕は見知らぬ少女と自転車で二人乗りして家への帰路に着いた。チャレッド号は快調

に進み、一時少し前には駅前まで戻ってこれる。ここまで来ればバスも多いから一人でも帰れるだろう。

「あんた今日暇よね？」

「えっ、いや」

「暇ね？ はい決定」

断る暇も無く、無理矢理少女に付き合わされることになった哀れな僕ではあるが、その少女はよく見ると結構可愛かった。長い髪に整った顔立ち、どちらかと言えば僕の周りよりかはテレビの中で動き回っていてもおかしくないほど可愛かった。

その後、僕と少女はバスの運営を管理している営業所に殴りこみに行った。いや、定期券の購入とかじゃないですよ、本当に殴りこみに行ったのだ。

何故かって？ 答えは一つしかない。あのバスの運転手に尋問してみた事をするためだ、どうしてバス停の前に立っている人間がいるのに止まりもせずに行くのかを問いただしていた。

営業所から出ると、駅の近くにあるデパートに拉致されて。よく解らないものを買っていた。つまりは僕は荷物持ちなのだろうな。その後はこれまた駅の近くの喫茶店でコーヒーをおごってもらったからよしとしようか。喫茶店から出ると荷物が多い少女が自転車で帰り僕は歩いて帰ることにした。

この日。この時からであろう僕の未来が決定付けられたのは。今は関係ないがターニングポイント。人生の転機が訪れるのはいつだつて突然なのかもしれない。

宿題の無い春休みは駆け足のように過ぎていって、入学式の日がやってきた。四月四日。なんとという不吉な日に式を挙行するんだ。呪われたらどうしてくれる。

入学式が終わると自分のクラスに行く。僕は一年二組だ。ちなみに小学校の時も中学校の時も一年二組だった。どうでもいいことだけれどね。

クラスメイトを見渡していると。一人の男子生徒が近づいてきた。

「ユキも同じクラスか」

「斉藤か。中学の時の知り合いはお前だけだな」

声を掛けてきたのは中学校の時の知り合いの斉藤。性格はどちらかと言えば大人しく、服装も学校の校則を守って崩した着方をしない。どちらかと言えば真面目なのだが、成績は僕とあまり変わらない。

「よゝす。俺。立花よろしくな」

僕と斉藤が話をしていると前の席の立花と言う男子生徒が会話に交じって来る、いかにも軽そうな奴だ。クラスの所々でも自己紹介と携帯のメアドと番号を交換している奴が男子でも女子でも何人かいる。どうせこの後のHRで自己紹介するだろうに。

案の定担任がクラスに入ってきて、担任の自己紹介が終わると窓際の席の奴から順に自己紹介をする事になった。

自己紹介といってもやはりそれは個人個人でまるで違う。なんかウケを狙っている奴や、少しでも早く簡潔に終わらせたい奴とか、もじもじしている人とか。自己紹介は人の数ほどある当たり前だがな。

「と言つ訳で、一年間よろしくお願いします」

別段ウケを狙おうともせず、普通に自己紹介を終えて安堵の息と共に席に着く。

「青ヶ丘中央中出身。水崎ほのか。新聞に興味がある人、もしくはジャーナリストを追究したい生徒は放課後私の所まで来てください。以上」

後ろから何処かで聞いたことのあるような声が聞こえてきた。それになんか言ってる事も恐ろしいほど意味不明だし。それに今は自己紹介といえるのだろうか。当惑している僕の事なんかシカトして時間は過ぎていき、HRが終わり放課後になった。入学式の日だから授業が無いのだ。

クラスメイトがそれぞれに帰途に着く。僕も斉藤と立花と一緒に教室から出ようとすると、ブレザーの後ろ襟を思いつきり引っ張ら

れて危うく窒息しそうになる。

「な、な!？」

「逃がさないわよ」

逃がさないって、僕があなたに対して何かしましたっけ水崎ほのかさん？

「じゃあ、僕達は先に帰ろうか」

と斉藤。

「そうだな、じゃあなユキ死ぬなよ」

立花は不吉極まりない事を言い残し、教室を出て行ってしまふ。

一年二組の教室に残っているのは僕と水崎ほのかさんの二人だけだ。当然のようにあんな意味不明な言い回しじゃ人も集まるわけは無い。

「で？ 何僕に何の用？」

「何の用？ じゃないわよ。あんた新聞部の一員だって自覚あるの？ サボりなんて言語道断！」

ちよつと待て。どうして当然のように僕は新聞部の一員にされているんだ？ そんな部に入るなんて承諾した覚えは一度たりともありませんが、一体どういうことでしょうか。

「どういうことも無いわ。あんたは強制入部」

「なぜに？」

「合格発表の日に会ったでしょ。以外と役に立つかもしれない思っただから」

以外とかよ所詮以外とかよ。と言うか僕に選択の権利は無いのかよ。高校に来たら帰宅部に入部して毎日練習にいそしみ、帰宅部の全国大会で優勝する事を誓ったのに。あんまりだ。

「じゃあ一つ聞かせろ、これは部活なのか？」

「そうよ」

「部室は？」

部室という単語が出て来たとなんにも水崎はと不敵に微笑む。

「文化部の部室棟に空き部屋があるのよね」

嫌な予感。物凄くいやな予感がする。

「学校側から正式な許可が下りるまでその場所を不法占拠すればいいのよ」

よくないよ。不法占拠って何だよ。おまけに人数も集まらない表向きは新聞部だけど本当に新聞を作るのかも怪しいのに学校側から正式な許可が下りるのかね。四月四日。入学初日にして文化棟の部屋の空き部屋を不法占拠する事になる。

その部屋のドアには英語部という札が掛けられている。どうやら元は英語部の部屋だったらしい。今はもう廃部になって空き部屋状態か。

英語部の部屋の中には当然のように何も無かった。長机すらない。そのため僕は水崎に言われるままに会議室から椅子と長机を拝借してくる。

僕が長机と椅子を教師に見つからないように運んでくると、部屋に様々な物が出現していた。本棚にポットに食器棚に普通の机がありノートパソコンが置かれている。

「一通りこんなもんかしらね」

「何処から持ってきたんだ、この家具は」

水崎に言われるままに僕は持ってきた長机を部屋の真ん中に運びパイプ椅子をセットする。部屋らしくなってきたと言えば部屋らしくなってきた。辺りを見渡していると、水崎が僕の事を睨んでいる事に気づいた。何かしたっけ、何でそんなに睨むんだよ。何か恐ろしいだろ。

「あんだ、何処かで会ったことある？」

「合格発表の日に会った」

「違う。もっと前に何処かで」

記憶に無いな。少なくともあの合格発表の日以前に会ったことはないはずだ。

「そう。ならいいけど」

深刻そうな表情をしていたのはその時だけでまたさっきまでの表情に戻り、僕に無理難題を押し付けてくる。

第1話「RESTART」(後書き)

どうも。相沢です。お読み下さりありがとうございます。今回はどちらかと言えば長編になると思いますが、どうか最後までお付き合いですれば幸いです。更新もなるべく早くしたいと思っておりますので、宜しくお願いします。

第2話「青ヶ丘新聞部」

次の日。登校すると一年二組の教室に入る前に、水崎が俺の姿を見つけ教室の中から出て来て僕の前に立ちはだかる。

「今日の放課後までに、部員を何人か拉致しておきなさい。あたしは学校側と生徒会へ提出する書類を作るから」

「はいはい。わかったよ」

それにしても、少しは言葉を選べよな拉致とかもろ物騒だぞ。どうやら水崎は僕が登校するのを待っていたのかそれだけを言うと、教室には戻らずにどこぞへと行ってしまふ。教室に入り自分の席にカバンを賭けて椅子に座る。

「災難な奴に目をつけられたな」

と前の席で身体ごとこつちを向けてくる立花。

「水崎さんの事？」

と斉藤も僕の机の横に来て言う。

「その通り。俺はあいつとは同じ中学だったから知ってるんだけどな。中学の時もわけのわからん新聞を月一で刊行しては学校中の掲示板に張り続けていたな。新聞の内容は毎月バラバラでな、U F O やU M Aの事について書かれていた時もあったな」

その他にも立花は中学時代の水崎ほのかの奇行を語り続けていた。それによると水崎ほのかは実に様々な事件を起こしているらしい。毎月の新聞刊行に校庭に落とし穴を作ってみたり。時効になった事件を片っ端から調べたおしてみたりとその奇行行為を語りだしたら止まるところを知らない。

「中でも一番衝撃的だったのは、学校ピラミット事件だな」

「なにそれ？」

「GW明けに学校に登校すると、校庭に机が運ばれていてそれでピラミットが作られていたんだ。で、それを作った張本人があいつだ」
立花は弁当のウインナーをつまみながら説明をする。朝から始め

た説明が昼休みまで長引くとはね。それにしても立花。お前随分水崎に詳しいな？

「嫌でも耳に入ってくるからな。あいつの伝説は」

「でも、彼女どうしてそんな事ばかりするの？ 理由は？」

「知らん。と言つのが立花の答えだった。そりやそうだろう、水崎の性格を考えるのならば、自分の行動を他人に理由をつけていちいち説明するなんて事ないだろうさ。大体、僕に何か言う時でさえも理由を言わないのだから。」

「先、部室に言つてて！」

あつというまに時間が過ぎ、帰りのHRも終わり後ろの席の水崎がそれだけを言つて、教室から出て行く。斉藤と立花が僕の横を通る時に立花は僕の肩に手を置いて人を哀れむような目で見つめてくる。

気色悪いから、見つめないでくれ。男に見つめられるなんて気分が悪くなる。

「頑張れよな」

ああ。適当に頑張ってみるさ。掃除当番の二人を横目に僕は教室を後にする。ぶらぶらと散歩気分で見慣れない校舎を歩いていく。中学校に比べると当然のように大きい高校の校舎はまだ何処に何があるのかを把握出来ていない。

迷子になるなんてことはないだろうが、せめて図書室の場所くらいは知っておきたいな。以外かもしれないが、僕は本が好きだ。新聞も読む方だから活字が好きなのかも知れない。

図書室を探そうかとは思つたが遅れていくと水崎にどやされそうなので、部室へと足を向ける。昨日までは英語部とプレートがかけられていた部室のドアには「青ヶ丘新聞部」のプレートが掛けられている。

ドアを開けて中に入ると、水崎の姿は無かった。まだ来ていないらしい。長机に鞆を置き、椅子に座る。本でも読もうかと鞆の中を探るが、あいにくと全部一度読んでしまった本ばかりだった。新し

く買った本を持ってくるべきだったな。暇だ。このままだと寝てしまいたいので僕は立ち上がって、水崎の私物のノートパソコンに目を留める。確か昨日回線を引いて来てインターネットに接続できるようにしたんだよな。

暇を潰すのには最適そうだが、勝手に人のパソコンを使う事は出来ないな。窓を開けて、外の様子を眺める。ここは四階なので眺めはいい。部活動をしていない二、三年生やまだ部活動に加入していない一年生が校門をくぐってそれぞれの帰り道についている。一年で、それに入学二日目で既に放課後の時間に拘束されている僕にしてみれば羨ましい限りだ。

ふと桜の木の枝が手を伸ばせば届く位置にある。僕はなんとなくその枝に向かって手を伸ばした。

部室のドアが乱暴に開けられ、その音に驚いた僕はあやうく四階からダイブしてしまいそうになる。なんてタイミングで現れるんですかあなたは。

「どんなタイミングで現れようとあたしの勝手でしょ。それよりほら、新入部員！」

水崎が連れて来たのは、一見中学生かとも見間違うほどの童顔と背の低い少女だった。

「坂上桜です。宜しく願いますね」

同じ一年で名前は坂上桜さんというらしい。水崎とは正反対の控えめな外見からは清楚という印象を受ける。水崎のどんな口車に乗せられたのかは知らんが、同情いたしますよ。

「で、ユキあんた誰か勧誘してきたの？」

「すっかり忘れていた」

僕があっさりと言い捨てた事に対してか、その事自体を忘れていた事に対してかは知らないが、水崎がその黒い瞳で睨んでくる。

「そういえば、どんな新聞を作るんですか？」

フォローの様に坂上さんが水崎に問いかける。助かります。水崎は満面に笑顔で、

「よくぞ聞いてくれたわっ！ UFOは実在するのか、UMAは居るのか、ピラミットはどうして作られたのか、この世界の全ての謎の真実を追究して、世界に向けて私達の存在を知らしめるための新聞を作るの！」

アホな事を言い出すのだった。

マジか。本気か。正気か。まあこいつの事だろうからマジで本気で正気なんだろうな。それはあくまで水崎にとつての正気であつて僕みたいな一般人には理解できそうにない。

「面白そうですね」

坂上さん。あなたまでそちら側の人なのですか。何を持って楽しいなどと。

「この高校は長刀部が無いらしくて、お家に帰っても暇ですから。丁度いいです」

元々坂上さんは楽天的な性格なのかもしれない。可愛い女の子が二人もいるこの部活が、何故かとんでもなく疲れる気がするのは何故だろうか。

「あの、僕帰つてもいいですか？」

「不許可。第一あんた部員を誰一人として集めてないじゃない。今からでもいいわ、さつさと行つて誰か連れてきなさい！」

今からつて言われても、もう大半の生徒は帰つたと思うんだが、まあいいかこれで逃げ出す口実が出来たというもの。僕は鞆を掴み部屋のドアを開けようとす。

「鞆は置いていきなさい、逃亡阻止の人質よ」

鋭い。

仕方が無いので、一年の教室がある校舎から回る事にしたがやはりそんなに多くの生徒は残っていなかった。残っている奴らも中学の時の知り合いは皆無で、あんな正体不明の部に誘う事は出来そうにない。

僕が教室の中を眺めながら歩いていると、前からドン！ と何かに衝突される。転びこそはしなかったが、少し体制を崩す。

「あ、すいません。よそみをしてたから」

「俺こそ悪いな、ぼーとしてて・・・あれ？ お前ユキか？」

その呼び名は本名ではないがな、僕はいつの頃からかユキと呼ばれるようになっていた。なんか女の子みたいな名前なのであまりそう呼んではほしくないのだが。斉藤や僕を知っている奴らのせいで高校でもその呼び名が定着しそうだ。

どうやら僕を知っているらしい男子生徒は一見して背が高かった。身長の高い僕にしてみれば随分羨ましい限りだ。それよりも、僕には目の前の男子生徒に見覚えは無かった。向こうは知っているのに僕は知らないと言うのがなんだかとてもアンフェアなように思える。「えっと、誰だっけ？」

「ええ！？ 忘れたのかよ!？」

そんなに驚かなくてもいいだろう。なんだかとても罪悪感が募る。「仕方ないかな、俺だよ中一の時同じクラスだったけど転校した創野誠之だよ」うのまことゆまき

「創野誠之？」

脳を定期テストの時のように回転させて、昔の記憶を掘り返す。中学一年の時転校していった。思い出した。あれは確か中学一年の時の自然体験学習とか言う奴で。変な場所に泊まり。土日はさんで月曜に登校したら約一名がいなくなっていた。

「思い出した。確か自然体験学習のときの夜に皆で集まって」

「そうそう、応援団の奴が」

創野君の勝利を祈り三三七拍子！

「って叫んで皆で三三七拍子をしたんだっけか」

「ようやく思い出したか。まあ三年ぶりだから忘れていても仕方ないかもしれないな」

「悪いな。ところで創野どうしてここにいるんだ？」

転校したはずなのにどうしてまたここに舞い戻って来てるんだよ。そんなに中一の時のやつらが恋しかったのか。

「違う違う。中三の冬に親父の仕事の都合で春先にはこっちに戻っ

てくる事になったから。高校はここを受けたんだよ。そんなに頭良くないしな」

「確かにお前は自由ヶ丘高校には受からないだろうな。あそこはバリバリの進学校だし」

「そういえばさつき斉藤にも会ったな。あいつはすぐ解ったけどな俺だって」

そうですか。それは大変申し訳ありませんでしたね、何か最近物忘れが激しくていかな、もう年かな。そういえば、何か大変な事を忘れてるような気がするな。何だっけか。

「そういえばさ、何か面白い部に入ってるんだって？ ユキ」

「誰に何を吹き込まれたかは知らないが、面白いかどうかは不明だ」

「UFOやUMAを探し回るなんて面白い事この上無いと思うぞ？

お前だってそういうの好きだったんじゃないのか？」

さてね、疑う事を知らない無垢な少年の時だったら、好きだったかも知れないな。だが、今では好きでもないし。興味も無い。何故ならそんな物は最初から実在しないからだ。宇宙人？ 未確認生命体？ いるはずがない。

「どうしてそう断言できる。誰かが証明でもしたのか？」

「さあな」

こうして青ヶ丘新聞部に新しい新入部員が入り四人になったわけだが、この四人に。もちろん僕も含む四人に運命的なものがあるとどうしてこの時の僕に知りえるだろうか。もしかしたら坂上さんや創野。それにほのかは既に知っていて知らなかったのは僕だけだったのかもしれないが。

プロローグにしては少し長めだったかもしれないが。これからの事を思えばまさしくこれはプロローグにしか過ぎない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9276b/>

R E S T A R T

2010年10月25日02時07分発行